

現代ラオスにおける伝統染織 —市場化・国際化のなかの伝統工芸—

伊藤 渚

総合研究大学院大学文化科学研究科 博士課程

1. 緒 言：研究の目的と背景

本研究の目的は、現代ラオスにおける染織文化を、物質文化の人類学的研究という視点から調査・研究することである。

筆者は、2007年～2008年にかけて、合計約8ヶ月間、ラオスの首都ビエンチャン市内の手織物工房や織物活動のみられる村で調査を行った。その結果、ラオスにおける手織物の商品化は、1960～70年代の戦争と、1975年の社会主義革命、1986年の市場開放から現在に至るまでの市場化・国際化といったラオス特有の歴史事象の中で成立したこと、そのプロセスの中で「ラオスの手織布」は、ナショナルな存在となり、主要な輸出品となっていたことが明らかになった。一方、手織物工房や村で、織物生産の実際を担っている織手はすべて女性であり、その大部分は北部地方からの移入者であることもわかった。つまり、織物の商品化を支えているのは、1) ラオス北部を中心としたタイ系諸族の女性たちの間で母から娘へと受け継がれている手織の技術と、2) 地方とビエンチャンを結ぶ親族ネットワークの存在であったのである。

今回調査は、この成果をふまえ、ラオス北部に位置するサムヌア地方でのフィールドワークによる参与観察と聞き取りにより、染織技術と技術の背後にあると思われる文化の伝承がどのように行われているのかを明らかにする研究の、第一次調査として行った。

2. 結 果：研究の成果

助成金の採択を受けた後、調査に入るための手続きをすぐに開始した。調査許可の取得と調査に入るための諸手続きを行い、2月にはホアパン県での調査許可証を取得、2月～3月にかけて、ホアパン県中・南部に位置するサムヌア郡、ビエンサイ郡、サムタイ郡の10村にて調査を行った。10村のうち、8村は「仏教徒ラオ」の村、2村が赤タイの村であった。

2-1. 調査地概要

調査地である「サムヌア」地方は、現在の行政区分ではホアパン県を中心とした一帯に相当する。ホアパン県は、ラオスの北東部に位置し、ベトナムと国境を接している。

「サムヌア」は織物の産地としてラオス内外でよく知



ラオス人民共和国概要

人 口	630万人 (2008IMF (推定値))
面 積	24万平方キロメートル
首 都	ビエンチャン
民 族	低地ラオ族 (60%) 他 計 49 民族
宗 教	仏教
国 語	ラオス語
通 貨	キップ (約 8500kip = 1US \$)
GDP	1人あたり \$ 859 (2008年) ※ \$ 390 (2004年)

外務省基礎データ 2010年4月現在

られている地域であり、その地名は、織物市場でブランド化している。ラオス人の中では、「サムヌア」人といえば、織物をする人たちだという認識があり、「サムヌアの人は織物が上手」といった語りも頻繁に耳にする。一方、「サムヌア」には、もうひとつの顔がある。サムヌアには、ベトナムのヴェトミンと共闘した社会主義革命勢力の本拠地が置かれていたのである。そのため、アメリカの支援を受けた王国政府との間に内戦があったベトナム戦争期の1964年から73年まで、この地域は、アメリカ軍による爆撃の標的となった。その結果、この時期、戦火を逃れ、多くの人々がサムヌア地方から難民として流出、各地に移り住むこととなった。

2-2. 調査対象

本研究の調査対象は、ラオス北部に位置するサムヌア地方村落部の、織物活動に関わっている「低地ラオ」の女性とその家族である。「低地ラオ」と呼ばれているのは、ラオスの全人口の60%を占めるタイ系諸民族である。「低地ラオ」として、ホアパン県の調査でこれまでに報告されてきた民族呼称には、タイ・ヌア（＝北部の人の意）、白タイ、黒タイ、赤タイなどがある。しかし、今回調査を実施したホアパン県中・南部地域において、村人が自称する呼称は「仏教徒ラオ（ラオ・プット）」と赤タイであり、白タイ、タイ・ヌアを称する人々には出会わなかった。なお、黒タイは、主にホアパン県北部に居住しており、ホアパン県中・南部地域には居住していないとのことであった。

人々の説明によると、赤タイ、黒タイは仏教徒ではないという。つまり、サムヌア地方のタイ系諸民族には、仏教徒化した人々と、仏教徒化していない人々がいるのである。一方、ホアパン県と国境を接するベトナム側では、白タイと黒タイはタイ族のサブグループとして認められており、ともに仏教徒ではない。

サムヌア地方の「仏教徒ラオ」は、言語的にも、後述するように習慣の上でも、ラオス中南部のラオよりも、黒タイや、黒タイに近いとされる赤タイに近い人々である。ラオス中南部に移住したサムヌア出身者が、北部の人を意味するタイ・ヌアという呼称をよく用いるのは、移住先である中南部のラオと、自分たちとの差異を意識した結果であろう。

サムヌア地方で実際には用いられていない「白タイ」という名称がこれまでたびたび報告されてきたのはなぜかという問題は残る。しかし、「仏教徒ラオ」という自称からは、サムヌア地方において、仏教徒／非仏教徒の

区分が、民族の区分以上に、強く意識されていることがうかがえる。

サムヌアの「仏教徒ラオ」は、黒タイ、赤タイと同様に夫方居住婚を行う。妻方居住が行われるのは、妻方の両親に面倒を見る息子がいない例外的な場合にのみである。これは、ラオス中南部のラオや隣国タイの東北地方に住むラオの、結婚した夫婦は独立することが強く、残った娘が夫とともに親と同居し親の面倒をみる傾向が多いという傾向とは異なっている。また、サムヌアの「仏教徒ラオ」の村々は、数年に1度、ラオ暦の4月（新暦2～3月）に、水牛供儀を伴う「ブン・ワット（寺祭）」と呼ばれる村祭りを行う。これはサムヌア地方独特の風習だとのことであった。

2-3. 織物重視の傾向

サムヌアの仏教徒ラオの村では、織物重視の傾向がみられた。調査村のうち、仏教徒ラオの村8村は、すべての家に機があり、一定年齢以上の女性はすべて織物を行っているとのことであった。「サムヌアの女性は、織物ができないと結婚できない」という言説があり、実際、織物の習得と結婚は直接結びついている。結婚に際して、新婦は、持参財として大量の布を準備し、嫁入り道具として、箆、開口保持具、綜統、杼の一式を生家から持参する。また、「仏教徒ラオ」の村5村では、夫婦が新郎の家に移動する際、新婦は箆を入れた布鞆をたすきがけにして行くとのことであった。

2-4. 織技法、素材系、染色

サムヌア地方で行われている一般的な織技法は、緯浮織と経浮織である。これに加え、いくつかの村では、需要に応える形で、緋織のシンを織るようになった。その時期は、それぞれの村で織られた布が商品化していく時期と重なっており、1990年代前半から2005年頃までとばらつきがある。商品化以前に、サムヌア地方で、緋織がどの程度行われていたのかは明確ではない。しかし、今回の調査で、サムタイ郡南部にあるH村出身者からの聞き取りにより、H村とその流域一帯の村では、商品化以前から緋織を行っていたことが確認できた。このことは、流域を一にする村々には共通の織物があること、そして、お互いを認識しあうだけの頻繁な往来があることを示している。

素材系には絹糸と木綿糸が用いられている。今、商品として織られている布には、経・緯・浮織紋すべてに絹糸が用いられることが多い。しかし、従来は、経緯ともに絹を用いた織物が織られることは少なく、絹糸は木綿

糸と併用されることが多かった。現在、糸は市場で購入することが多いが、木綿の栽培や養蚕も年配の女性によって行われている。

在来種の木綿は繊維の短いアジア綿で、焼畑で栽培される。木綿の栽培は養蚕よりも早くにやめてしまう場合が多いが、サムタイ郡の南部では現在も在来種の白綿の栽培を行っていた。サムヌア地方では、葬儀に木綿で織った白布が必要なこともあり、どの家でも、木綿の白布を織って所持していた。

サムヌア地方では「ノイ」と呼ばれる多化性の蚕（熱帯種）と、サムヌア郡の村では「ナーン」、サムタイ郡の村では「ファー」と呼ばれる一化性の蚕（温帯種か）の2種類の在来種が養蚕されてきた。色は、それぞれ、白と黄色がある。在来種は2種とも、繭層歩合の多い、いわゆるボカ繭である。白色の蚕からとれる糸は漂泊したような白さで特徴がある。食べさせる桑は現地語で「ノイ」と「ゲオ」と呼ばれる2種類で、2種類の桑の使用上の区別はない。養蚕のサイクルは、雨季であり暑期でもある4月～11月にかけて「ノイ」を3回、乾季であり寒期でもある12月～3月にかけて「ナーン/ファー」を1回養蚕するというものである。

現在、染色のほとんどは市場で購入した化学染料を用いて行われている。しかし、商品としての需要もあり、天然染色を完全にやめてしまったわけではない。サムヌア地方では、天然染色の染料として、琉球藍、ラック、紅の木、ヘムの根の4種類が主として用いられてきた。サムヌア郡北部のN村は、山間の寒冷な気候のため、

紅の木とラックを育てることができないので、交流のある麓の仏教徒ラオの村からそれらを得ていたという。

以上のように、織技法、素材糸、染色には、サムヌア地方一帯に及ぶ共通性がみられることが、今回の調査でわかった。

3. 考 察

1) サムヌア地方では、民族よりも、仏教徒であるかどうかグループ間の区分として重視されている。

2) サムヌア地方の「仏教徒ラオ」たちは、夫方居住婚を行い、共通の村祭りをを行うなど、ラオス中南部のラオとは異なる側面を持つ。

3) 結婚式で新婦が箒を入れた布靴を下げるなど、織物が重視されており、また女性と強く結び付けられる傾向があることがうかがえる。

4) 織技法、素材糸、染色の様子からは、同一の流域に点在する流域ごとのまとまりと、そうしたまとまり同士をつなぐより広域なまとまりの存在がうかがえる。

5) こうしたゆるやかな紐帯は、織物文化と関連を持ち、サムヌア地方一帯の「仏教徒ラオ」全体に及んでいる可能性がある。

4. 謝 辞

本調査・研究は、財団法人三島海雲記念財団からの学術奨励金によって行うことができました。ここに厚くお礼を申し上げます。